

秋の地区予選 GREEN PRIDE ～ 笑えなかった夏休み ～

7月12日、夏の大会の悔しさを噛み締め、新チームは、選手10名、指導者6名でミーティングからスタートした。イライラを物にぶつける。グラウンドで歩く。愚痴や不満を言う。すぐに他人のせいにする。下を向く。そんなチームは嫌だ。自分達で勝てるチームをつくる。応援されるチームをつくる。テーマは『笑』だ。そんな覚悟を決めて、ミーティングを終えた。練習が始まり、まずキャプテンが行動や意識を変えようとしていた。周りに言葉をかけ、イライラした感情が湧いてもぐっところえて、前を向いて練習に取り組み始めた。それにつられて下級生が黙々と自分の役割を果たそうと努力していた。ただ、上級生の中には、なかなか自分の行動を変えられずにいる選手もいた。

8月の半ば、練習試合の時に攻守交替で走らない選手が出てきた。それは、上級生でチームの中心選手だった。自分がうまくいかないからという理由で、下を向いたまま、前を向かず気持ちが切れてしまっていた。すぐさま、ミーティングを行い、新チームで覚悟したことを確認し、自分達自身を見つめ直した。そこから、上級生たちの意識と行動が少し変わってきた。

そして、8月20日、秋の地区予選が始まった。初戦は逗葉高校。結果は力及ばず敗退してしまったが、選手たちは集中力を持続させていた。テーマの「笑」も忘れていなかった。ミスをして次への行動へ移そうとしていた。この試合で、今までの練習で誰かから励まされても、うつむいたまま思い悩んだままプレーを続ける1年生の選手が前を向いて、今できることをやろうと行動し始めていた。8月21日、2戦目。相手は追浜高校。昨日の疲れからか、初回から選手達に集中力はなく、ベンチでは言い訳や愚痴、行動の遅さや力任せのプレーが目立った。これまで我慢を続けていたキャプテンの顔にもイライラが見られ、試合はワンサイドゲーム。その姿は、もはや闘うチームではなかった。闘う前から自分達に負けていた。さらにこの試合中に、2人の選手が負傷していた。10名中2名が負傷。その内の1人はキャプテンで肩を脱臼してしまい、この大会は絶望的であった。今のチームで試合をしても何も次につながらないと考えた指導者達は、棄権を覚悟し、選手達に棄権を選択するかどうか考えさせた。

大会の予備日である次の日、天候は台風の接近で大荒れであった。選手たちは明日の試合に出場するか棄権するか、決断をするためにミーティングを開いた。そこで、はじめて自分達のこれまでの想いを伝え合うことができた。誰のどの行動がチームに影響を与えているのか。上級生同士はもちろん、下級生からも意見が挙がった。自分の想いを表現する勇気を持ち、それを受け止める覚悟を持ったのだ。すぐに愚痴を言ったり、走ることをやめてしまったり、自分の殻をやぶれないでいた選手達もそのことを自覚し、行動に移す覚悟を持ち始めた。そして、棄権ではなく、どんな大差で負けようと諦めないで最後までやるために闘うことを選手達は決めた。闘う意志を聞いた指導者達は、明日も同じようなことが起きれば、途中で相手チームには失礼になることを重々承知で棄権するという覚悟のもと、試合を行うことを決めたのだ。

いよいよ気持ちを新たにして臨む大会の最終戦。相手は湘南学院高校。その朝、指導者のもとに電話での連絡が入った。選手の1人が高熱を出してしまって、立つこともままならないということだった。その選手は、1年生でこの地区予選で2日とも投手として、黙々と投げていた選手だった。日頃からもチームのために自分の役割を果たそうとずっと努力をつづけていた。その報告を聞いて、1度は覚悟を決めて、大会に臨んだが、棄権を選択せざるを得なかった。そのことを選手達に伝えるとその場にいた全員が悔しい気持ちで一杯になったが納得するしかなかった。ただ、結果はどうあれ、この大きな決断をするために選手達はとことん話し合い、これからのチームのことを考え、自分自身と向き合い、絞り出した答えはとても、大きな進歩だった。選手も指導者達も、その場にいた全員が悔しい想いを胸にした。この経験を次の大会につなげていこうと決意したとても大きな一日であった。